

## 『戦前期福井の起業家・伊藤仁作』

### 刊行の意図

明治維新後、越前と若狭は廃藩置県の荒波と府県統合に翻弄され、一時は越前の現在の嶺北地区が石川県に、若狭と越前の敦賀郡が滋賀県に編入されるなど、明治14年の福井県設置に至るまで、紆余曲折を強いられた。

若越の県民はこれら政治的動向に大きく左右されながらも、他面では、民力向上に向けた様々な努力が続けられ、これが福井への羽二重織技術の導入、後の「繊維王国・福井」の形成に繋がった。

これまで、私の研究は近代福井の形成を産業発展史の観点から整理することに主題を置き、特にその原点ともいべき羽二重織物の福井での発展・波及過程を諸資料を基に整理し、併せてそれを担った機業家や官吏の事績を掘り起こす作業を行ってきた。

この研究には同時に、明治、大正、昭和戦前期の企業家の事績調査とも密接不可欠であった。羽二重に代表される福井の絹織物の発展は、織機の保守を通じた機械工業、動力を通じた電力業など様々な分野と密接に絡み合い、業種・業態の枠にとどまらない資本関係や姻戚関係などネットワークで結ばれていたからである。

ここでは本県における在来産業の革新と織物王国の周辺事業の解明に欠かせない人物として、起業家編伊藤仁作の事業と事績の概要をとりまとめた。

明治、大正期において、電力事業や電機資材販売に従事し、初期の県内外の発電所工事を担い、戦前期には化学工業分野に進出、また福井県企業の海外進出の嚆矢ともいべき電力業での朝鮮進出を果たし、県外では鉄道経営に従事するなど多彩な事績を残した起業家である。

羽二重商として後には人絹王といわれた西野藤作（人絹取引所理事長、福井商工会議所会頭）を排出した地方財閥西野財閥との関係も深く、力織機の動力、また人絹織物の原料となる人造糸（ステープル・ファイバー）の製造には欠かせない二硫化炭素の化学工場の経営など、本県機業家、事業経営者とのネットワークを活用して様々な事業を展開した。

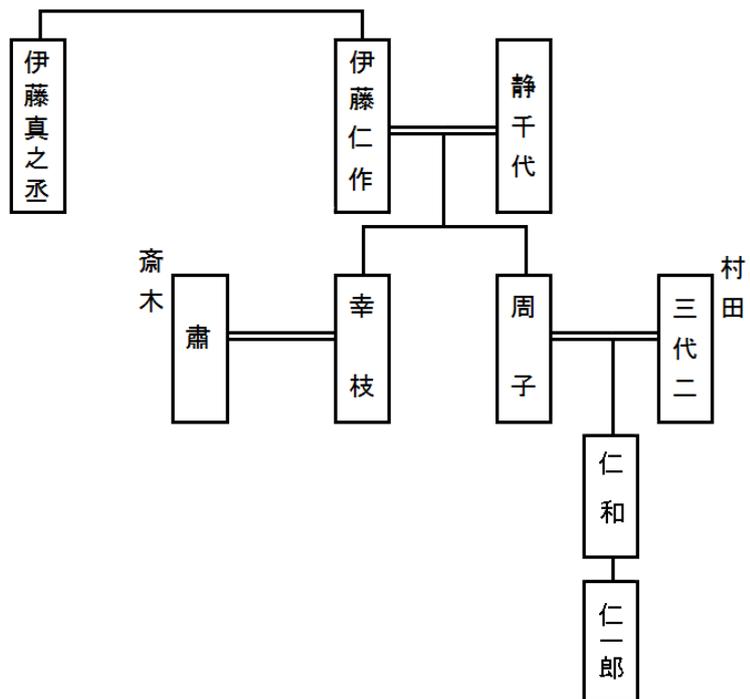
なお全文は冊子で40数頁になるが、ここでは前半部を中心に抄録した。

(付1) 伊藤仁作の起業(創業)会社ならびに主要関係会社概要

会社名	設立その他概要
伊藤電機商会	明治43年創業、後昭和6年4月法人化(合名会社) 本社: 福井市呉服町通り、後に本町通り(佐久良下町15番地)移転 発電所建設、電気工事、電気資材販売会社で仁作の活動の中心会社
耳川水電(株)	大正5年3月設立、大正7年1月操業開始 本社: 三方郡耳川村(河原市) 発電所は三方郡新庄、三方郡の素封家グループとの共同事業、これまでの発電所建設工事受注から電力分野へ進出
若州水力電気(株)	大正8年8月設立、耳川水電の別会社として出発、後に耳川水電に統合 本社: 三方郡耳川村(耳川水電内)
河野水電(株)	大正9年2月設立、発電所は河野村(河野川三の瀬) 本社: 福井市伊藤電機商会内
越前建材(株)	大正9年3月設立 本社: 福井市豊島中町(伊藤電機商会資材倉庫)
公州電気(株)	大正10年5月設立、朝鮮・忠清南道公州郡公州で発電事業 本社: 福井市伊藤電機商会内(開業当初)、後に朝鮮公州の現地へ移転
南総鉄道(株)	大正15年9月設立、千葉県房総半島中央部の長生郡関係者によって着工するも行き詰り、仁作が出資し、工事を引き継ぎ昭和8年6月開業 本社: 千葉県長生郡茂原町、後に長生郡水上村笠森に移転

その他県内外の多くの発電所工事を手がけた

(付2) 伊藤家略系図



## 第1章 起業まで

起業家・伊藤仁作（いとうにさく）は、明治14年4月2日福井県旧坂井郡本荘村上番仏徳寺に伊藤清左エ門の三男として生まれた。後に深く電気事業に深く関わることとなる少年仁作は、多感な子ども時代を送ったと考えられるが、まずは当時の我が国に於ける電気事情からみていくことにする。

### 維新の近代化と電気

日本で最初の電気の利用は通信分野ではじまった。維新政府はわが国の近代化に電信網の普及は欠かせないものとして明治2年には早くも横浜で架設実験に乗り出し、明治2年末（新暦で明治3年1月）東京横浜間が開通、電信の利用がはじまった。福井では明治天皇の北陸巡幸に合わせて整備がすすみ、明治11年9月、敦賀～福井～金沢間で開通し、福井電信分局、敦賀電信分局が開局し、敦賀からは大津に接続していた。

照明や動力としての電気の利用がはじまったのもこの頃で、明治11年3月虎ノ門の工部大学校のホールに初めてフランス製のアーク灯が点灯された。明治15年には東京銀座京橋1丁目で2000のアーク灯が点灯され、東京市民の目を奪ったとされる

これらはショー的色彩が濃く、臨時の点灯にすぎなかったが、明治16年ごろからは工場の照明として自家発電による電気の利用が始まる。

横須賀造船所、小石川砲兵工廠、千住製絨所、さらには官報印刷場（白熱電灯）など官営工場での電気が導入され、民間では明治19年9月、「日本資本主義の父」と言われる渋沢栄一らが出資した大阪紡績会社の三軒家工場が深夜操業に対応するため導入したのが最初となった。

以後、さまざまな工場で発電機がすえられ、電灯がともされ電気の利便性が広まるなか、明治19年7月、日本初の電力会社東京電灯（東京電燈）が開業、東京電灯は麴町や神田など5カ所に火力発電所を設置し、いよいよ電線の配架による供給販売事業が始る。

明治20年代に入ると、電線を配架し電気を供給販売する電灯会社は東京以外でも開業し、神戸電灯につづき、大阪・京都・名古屋で相次いで設立されるに至る



#### ◆「電燈供給発祥の地」碑

明治 20 年（1887）11 月 21 日、東京電燈会社が日本橋区南茅場町 45 番地にわが国初の発電所を建設し、同月 29 日から付近の日本郵船会社、今村銀行、東京郵便局などに電気の供給を開始。これがわが国における配電線による最初の電燈供給となった

## 水力発電と動力

電気が実用化されはじめた頃の電力は全て火力発電であったが、明治 21 年宮城県仙台市の宮城紡績会社ではじめて水力発電が稼動した。ただし出力は 5KW に留まっていた。次いで明治 23 年栃木県に設立された下野麻紡織の発電所では 100KW を超え、足尾鉦山でも水力発電の利用が開始された。翌 24 年には隣県の群馬桐生市に日本織物が創設され 126KW で運用を開始した。日本織物の水力発電所跡の遺構は今でも残っている。

関西でも明治 18 年琵琶湖疏水工事が着工、何度も計画変更を繰り返すなかで、水力発電の実用化に踏み切り、明治 24 年蹴上発電所が 80KW×2 台にて日本最初の商業用水力発電所として運用が開始される。こうした電気の利用は、明治 30 年代に入ると発電所からの送電線工事、建物工場内での屋内配線、電気器具の販売というあらたな事業を勃興させることになるのである。

## 仁作の生誕と修行時代

明治 14 年 4 月 2 日、伊藤電機の創始者伊藤仁作は福井県旧坂井郡本荘村上番仏徳寺に伊藤清左エ門の三男として生まれた。おそらく少年仁作は多感な子ども時代に、明治の文明開化の波を肌で感じていたのではないだろうか。

小学校を卒業すると、ただちに郷里を離れて神戸の電機メーカーに就職した。これが仁作の生涯を決定づけることになる。仕事は電気に対する土木工事や発電機の据付工事が主で、電気関係の現場で修行した。京都のインクライン、蹴上発電所の保守工事にも従事したという。ここで土木や電気のイロハを学んだのである。

伊藤仁作が修行を積んだ神戸・大阪・京都は、また電気の最先端を行く地域でも



あった。明治26年に神戸で初の映画公開といわれるのぞきからくり「キネマスコープ」が公開。翌30年には現在の映画と同じ方式での「シネマトグラフ」が京都・大阪で興行し、連日大入り満員を続けたという。

明治36年には大阪で第5回内国勸業博覧会が行われた。この博覧会は電気利用が飛躍的に進んだ博覧会で、夜は各パビリオンにイルミネーションをつけて夜景を楽しませた。イルミネーションという言葉が広く知れ渡るきっかけともなった。

後に、この跡地に創られた新世界・通天閣が開業すると、イルミネーションは、ショーアップ効果として取り入れられ、それは戦後の二代目通天閣にも受け継がれている。

伊藤仁作もまた、電気の未来に明るいものを感じていたのではないだろうか。

明治37年。日露戦争が始まり伊藤仁作も従軍する。出征に当たって、郷里本荘村の鎮守の杜が天満宮であったため、九州の太宰府へ参詣し、お守りとしてお宮の下の土を一振り持ち帰り、凱旋できれば必ずお祀りすると誓ったという。

後年、福井市内に家作の長屋街を所有した際には、その広場の中心に祠を建て天満宮とし、春秋2回のお祭りを欠かさなかったといわれる。伊藤仁作は国内のどこにいても、その時期になると福井に戻って来た。それは戦災で長屋が焼失するまで続いたという。その神体は太宰府の土、勲八等白色桐葉章と従軍章、それに祀った際の願文であった。これらは戦火を逃れ、現在、仁作が創業した会社の後継企業にあたる伊藤電機販売の神棚に現在も納められている。また、郷里の天満宮にも仁作は鳥居と灯籠が寄付し、現存している。

明治38年に日露戦争は終結したが、この戦争は仁作にとってもう一つの転機をもたらす。生涯の友人となる「戦友」を得たことである。特に若狭出身者素封家との生涯にわたる深い友情はこの時に築かれたもので、後に仁作が事業を拡張する際に大きな支えとなった。

戦争終結後、仁作は神戸に戻り、勤務先にお礼奉公をしたのち、明治43年に福井市照手上町（旧京町）に伊藤電機商会を設立する。当時は九十九橋から京町は北陸道の通る繁華街で、ここに店舗を構えたことで仁作の意気込みが伝わってくる。店は土木工事、電動機などの据付と電気資材・器具販売の2部門に分割し、前者を仁作が後者を弟の真之丞が責任をもつ体制とした。真之丞は清左エ門の四男で9歳年下の弟であった。仁作は工事で店を留守にすることが多いだけに、全幅の信頼を置ける弟真之丞の事業参画は伊藤電機商会の発展に欠かせないものであった。

## 福井の電力事情

明治23年11月には帝国電灯会社福井支社が設立され<sup>1</sup>、福井県でも電気への関心

---

<sup>1</sup> 「福井新聞」明治23年5月9日、14日、17日号

がたかまりつつあったが、結局これは実現せず、明治 27 年 11 月 5 日福井市佐佳枝下町の伊藤練工場（場主伊藤寅次郎）で発電機を設置して電灯を点じたのが福井県における電気点灯の嚆矢となった<sup>2</sup>。当日は一目電気を見ようとたくさんの人が集まったという。伊藤は明治 5 年伊藤家の養子となり、明治 22 年 46 歳の時に自宅隣接地で伊藤練工場を創業、福井の精練事業の草分けを担った人物の一人である。なお、この発電には福井市内の益永茂三郎と九頭竜川舟橋の龍田利見が協力したとされている。



◆宿布発電所跡（福井市）

事業としての電気は、福井県では京都電灯株式会社福井支社の開業が最初となる。明治 28 年 11 月同社の福井進出が決まり、足羽郡酒生村宿布（現福井市）に足羽川を利用した水力発電所を建設することが決定。支社は福井市佐佳枝町に設立され、宿布発電所工事は 30 年 11 月に起工し、32 年 2 月に竣工、出力 80Kw の発電機が設置され、5 月 21 日、福井市内 225 戸に配電を開始した<sup>3</sup>。

この宿布発電所で、石工として従事したのが熊谷三太郎である。北陸線の鉄道建設で実績をあげていた熊谷三太郎は、水路建設の石工としてその期待に応え、宿布発電所の落差 7 m の石の水路を完成させた。京都電灯は、宿布発電所での成功を受け続いて大野郡北谷（現勝山市）に中尾発電所建設を計画。地元業者としてすでに土木請負業をおこなっていた飛島文吉の飛島組が工事に関わることになる。飛島組はこの後北陸をはじめ各地の水力発電所を手がけることとなるが、これが初めての水力発電所工事であった。この時、飛島文吉は熊谷三太郎の宿布発電所工事の実績を高く評価し、熊谷に協力を求め、これが熊谷と飛島組の運命の出会いとなった。

開業まもない仁作は飛島組や熊谷三太郎の仕事の下請けをしながら各地の発電所や鉄道の土木工事で実績を積んでいくことになる。

<sup>2</sup> 「福井新聞」明治 27 年 11 月 7 日号

<sup>3</sup> 『福井に初めて電灯をつけた発電所』（平成 5 年、福井総合制御所）、『京都電灯株式会社五十年史』（昭和 14 年）54・55 頁他参照

## 第2章 事業の基盤の確立

### 事務所、自宅の新築

大正2年7月、仁作は呉服町通り（照手上町）から福井市内の本町通り（佐久良下町15番地）に会社兼自宅を新築し移転した。呉服町通りが幕末からの老舗が軒を並べていたのに対して、本町通りは明治中期以降、銀行や大手の糸商が軒を並べる新興業務地域で、活況があり日々発展している通りであった。

新築の事務所に連なって仁作の住宅、別棟に弟真之丞の住宅が建築され、これまでと違い余裕のあるスペースであった。

仁作はこの年の1月に滋賀県出身の静千代と入籍しており、事業拡張だけでなく、夫婦の新居もかねての事務所移転、自宅新築であった。



◆照手上町・奥が呉服町通り（左は福井郵便本局）



◆本町通り（手前は十二銀行福井支店）

### 黒部川水系の発電所工事

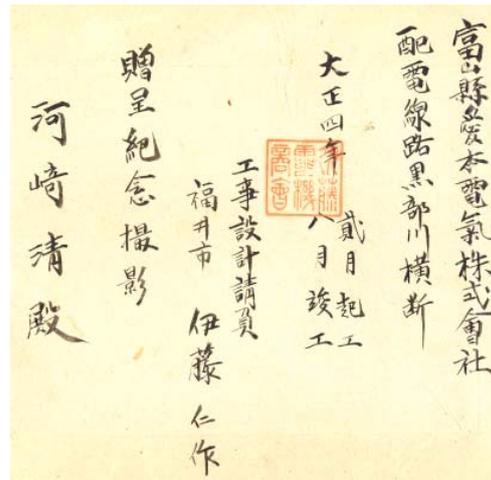
事業も福井県内は勿論、各地で土木・発電所工事を請負い、また電気も電灯が普及し、電力（動力）も産業の機械化と共にその需要が増え始め、電気設備工事は順調に発展していた。

仁作はこの頃から土木工事の元請にも積極的に応じはじめていた。

現在記録として確認できる最初の元請工事は、富山県の下立（おりたて）発電所にかかる黒部川横断送電設備工事である。発注者は大正3年12月に下新川郡下立村設立された愛本電気株式会社で、大正4年2月に受注し8月に竣工している。折立発電所は竣工直後から運転を開始し、昭和12年まで使用された。因みに黒部川といえば黒四ダムなど水力発電で著名であるが、この黒部川を利用した最初の水力発電所がこの下立発電所である。



◆黒部川送電線竣工記念写真パネル



◆記念パネルの裏側

この工事に関しては、仁作は竣工記念写真を厚紙のパネルに仕立て複数枚作成し、関係者に配布したものである。その内の1枚が若狭三方郡耳川村の河崎清に送られ現存している。この頃仁作は、福井県内の水力発電所の設計、工事に積極的に乗り出しており、県内の有力者との折衝を精力的に進めていたのである。

その核となったのが河崎清や角脇林蔵らを中心とした若狭三方郡の有力者グループである。角脇とは日露戦争福知山連隊で召集をうけ従軍し、同じ福井県出身者として親しくなり、やがて河崎ら三方郡関係者と広く交遊することになったと考えられる。

グループの中心である河崎清は、遠敷郡松永村の出身で衆議院議員小畑岩次郎の弟で、三方郡耳村の大地主河崎家に婿養子に入り、晩年には衆議院議員も2期務めている。壮年期には県会議員として、嶺南地域の基盤整備や産業、教育振興に広く活躍した人物である。

電気が地域振興に果たす役割を日頃仁作から聞いていた河崎や角脇は、三方郡の有力者、素封家を糾合し、大正5年3月耳川水力発電所株式会社を資本金40万円(払込7万5千円)で設立、三方郡への電気供給を計画した。発電所は、耳川上流の新庄地区に建設することになり、発電所の基本設計から工事、配電を仁作の伊藤電機商會が受注、大正7年1月7日操業にこぎつけ、電気供給を開始した。

役員構成は次頁の通りで、村長や三方銀行、熊川銀行、若狭織物の重役陣など三方郡の素封家が名を連ねている<sup>4</sup>。

<sup>4</sup> 仁作は共同としてこの事業に取組み、設計、工事を担い、開業後の運営にも深くかかわったが、役員に就任するのは操業から2年経過後のことである。この経緯については後述する。



◆当時の耳川水力発電所（新庄地区）

◆耳川水電株式会社（概要）

本社 三方郡耳村（河原市）

設立 大正5年3月

操業 大正7年1月

資本金 40万円（払込7万5千円）

役員

代表 河崎清（耳村）

取締役 上登野卯之助（耳村）

中瀬宗太郎（耳村）

伊藤宗助（耳村）

角脇林蔵（山東村）

監査役 武長弥栄造（耳村）

牧野秀太郎（耳村）

市野信次郎（八村）

現在伊藤家に、この時の工事現場での記念写真が残っている。数少ない戦前期の写真の一枚である。民家の増築部分に伊藤電機商会現場事務所の看板がかかっており17人が写っている。法被を着ている工員は8人で、法被の襟には左襟に「本店福井市本町」右襟に「伊藤電機商会」とあるものと、左襟に「伊藤電機商会」右襟に「福井市本町」と2種類



◆工事現場事務所での記念写真

あり、後者には当時の社章が染められているのがわかる。

写真の真ん中でハットをかぶり、オーバーを着て椅子に座って居る人物が“シンのオッサン”の愛称で、創業以来仁作とともに伊藤電機の発展に寄与した弟の真之丞である。

撮影場所は水力発電所が建設された耳川沿いの新庄集落近くと推測されるが、具体的に特定するには至っていない。なお写真の隅に三方郡の写真店の標が記されており、この写真店も創業 100 年の歴史を有し、店舗は少し移動しているものの、撮影者の孫にあたる当主が現在も事業を営んでいる。

耳川水電株式会社の経営陣は、三方郡出身の経営陣は地元の有力者ではあっても、電力事業については殆んど経験を有していなかった。仁作と交流の深い若狭三方郡の有力者と仁作が共同して創設したため、当初から仁作は経営に積極的にアドバイスしてきたが、取締役として正式に耳川水電株式会社の経営に参画するのは開業後 2 年ほど経過してからである。

この背景には、仁作と耳川水電関係者は、耳川水電建設と並行して同じく耳川村に事務所を置く兄弟会社として若州水力電気株式会社の創設を進めていたことが関係している。この会社は、河崎、上登野、伊藤など耳川水電の重役の子弟を取締役とし、仁作が社長に就き経営責任を持つことになっていたからである。

◆若州水力電気（概要）

設立 大正 8 年 8 月  
 資本金 10 万（内払込 2 万 5 千円）  
 本社 三方郡耳村（河原市）  
 取締役 伊藤仁作（代表）  
           河崎増治  
           上登野種二郎  
           伊藤源次郎  
 監査役 城戸秀次郎

電 氣 諸 機 械 器 具 材 料  
 水 力 火 力 測 量 電 氣 工 事 設 計 請 負  
 自 家 用 工 作 物 施 設 工 事 設 計 請 負  
 電 氣

伊藤電機商会

同出張所  
 若新福振電福  
 州瀧井替井井  
 河縣市市大市  
 原西市阪三市  
 青頸城久七市  
 梅郡佐三九本  
 市郡郡良二八本  
 村町下三番番町

◆大正 7 年伊藤電機商会広告

若州水力電気株式会社の事業内容について詳細は不明であるが、耳川水電が地域の家庭用電気・電灯の供給を目的としたのに対して、若州水力電気は産業用の電力を供給する計画ではなかったかと推測される。この頃三方郡八村で若狭織物株式会社創設されており、その経営陣には耳川水電の関係である市野、中瀬、門脇、伊藤が加わっており、また、三方郡への化学工場の誘致話が持ち上がっていたからである。力織機をはじめ工場用の電力の伸びが期待される状況にあったと考えられる。

しかし、この 2 社体制構想は実現しなかった。化学工場の誘致話は立ち消えとなり、また、ごく限られた地域に二つの電力会社並存することの無理もあり、大正 9 年には仁作も耳川水電の取締役に就任し、事実上耳川水電株式会社に 1 本化された。

大正 7 年当時の伊藤電機商会の広告が残っている。これを見ると出張所を新潟県西頸城郡青梅（現糸魚川市）と耳村の 2 箇所設置していることがわかる。出張所と

なっているが、実際には連絡所を兼ねた工事事務所と考えられ、この時期耳川村だけでなく新潟県でも発電所工事を受注していたと考えられる。仁作はこのほか北海道での発電権利を所持しており、福井の伊藤家に北海道から早期着工の依頼のため来訪者があったこと、この時仁作は権利を無償譲渡するので現地で対応してほしい旨を告げ固辞したことが伝わっている。



◆耳川水力発電など三方郡の諸事業に関わった素封家達  
(前列中央が河崎清、後列左から2人目が角脇林蔵)

## 電力事業、発電所建設事業の発展

電気の利用は家庭、さらに工場電力と飛躍的に発展していたが、未だこの恩恵を受けられない地域が残っていた。南条郡河野村もその一つで、中近世には物資輸送に欠かせない西街道（河野・甲楽城～府中〔武生〕）の起点として、また北前船の船主が軒を連ね繁栄を謳歌したこの地域も、明治維新後、海岸を通る春日野道（現在の国道8号）や鉄道の開通でその役割を終え、往時の勢いを失い、電気も未開通地域であった。

仁作はこの地域に電気を供給すべく河野川の水系を利用して河野水電株式会社を設立した。当時の電力会社は、発電所工事は外注し、稼働後に経営を担う形態であったが、河野水電は水路、発電所の設計からその土木工事、会社の運営まで全て伊藤仁作（伊藤電機）が担うという他にあまり例のない方式ですすめられた。会社は大正9年2月に設立され、本社は福井市佐久良下町の伊藤電機商会内に置かれた。発電所は河野川の三ノ瀬に、取水口は同じく二ノ瀬に設けられ約900m引水し、落差11.8mを利用して東芝製発電機を使い50Kwを発電した。供給地域は南条郡河野村、南条郡坂口村、丹生郡白山村の3村で、利用料金は普及していた十燭灯で月50銭であった。



◆河野村西街道入口付近



◆河野発電所跡

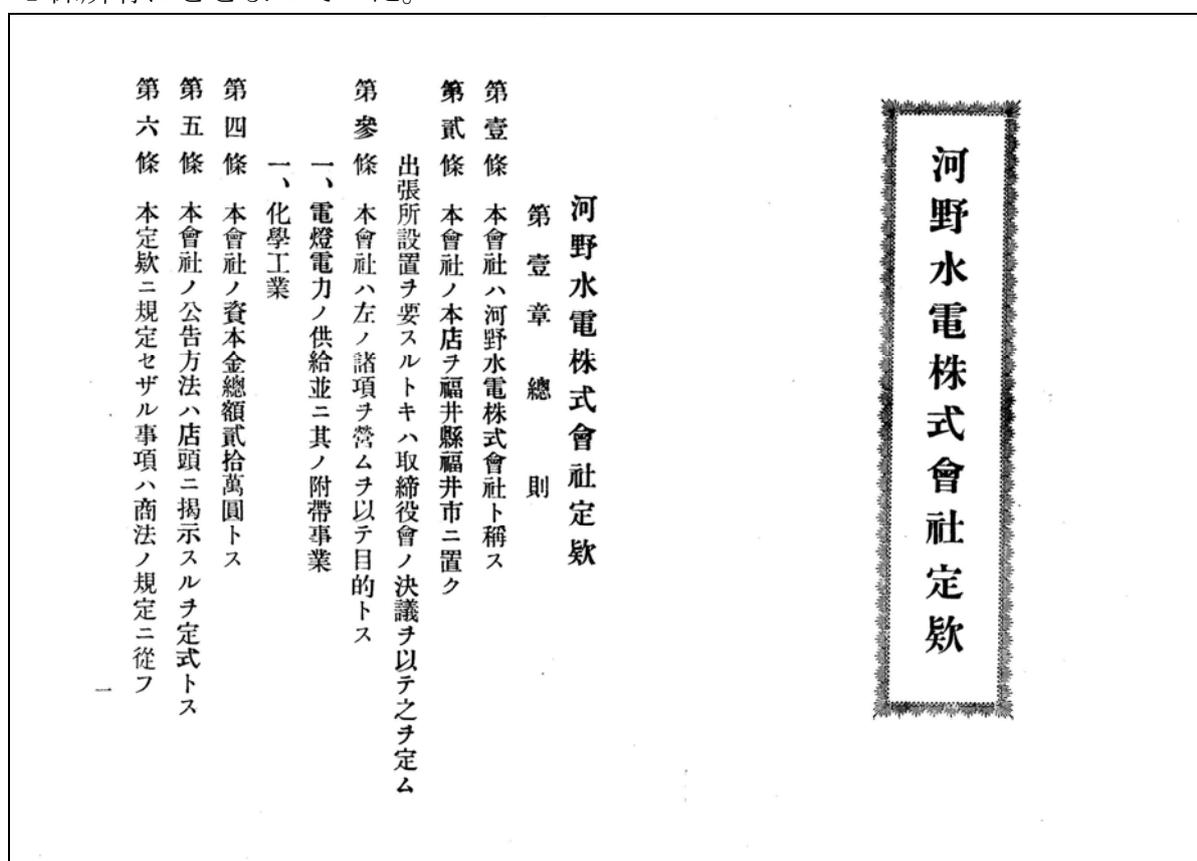
開業当時の役員構成は資料のとおりで社長の仁作、監査役の刀禰弥平（河野村）を除くと何れも耳川水電株式会社の重役陣で（前記耳川水電株式会社役員参照）で占められている。なお河崎増治は河崎清の養子（娘婿）にあたる人物で、地元耳川村で医院を開業していた。開業後にまもなく監査役の刀禰と取締役の河崎は退任し、仁作を含め4名の取締役と2名の監査役で事業にあたった。出資は100株以上でみると次頁の通りである<sup>5</sup>。

<sup>5</sup> 河野水電株式会社『営業報告書』（各期）、その他『河野村誌』（河野村誌編さん委員会、1984年）参照

単位：株

氏名（）内は住所	創業時	大正14年増資	合計
伊藤仁作（福井市）	685	825	1510
角脇林蔵（三方郡）	200	220	420
河崎清（三方郡）	200	0 <sup>6</sup>	200
河崎増治（三方郡）	100	220	320
伊藤宗助（三方郡）	100	220	320
上登野卯之助（三方郡）	100	220	320
中瀬宗太郎（三方郡）	100	220	320
刀禰弥平（南条郡）	105	0	105

このほか耳川水電の監査役であった武長弥栄造が50株、地元の河野村関係者は監査役の刀禰以外は10株や5株単位で所有しているものは少数で、地元住民の大半は1株所有にとどまっていた。



◆河野水電定款（操業開始当時）

河野水電株式会社の定款は、事業目的として電力供給を第一にあげているのは当然であるが、第二項として「化学工業」をあげており、電力の需要先である化学産

<sup>6</sup> 大正14年の増資当時、河崎清はすでに家督を養子の増治に譲っており、増治名義で増資している。なお河崎は、この年11月衆議院議員に現職のまま病没した



るものに南越電気による日野川水系の湯尾発電所（第二日野川発電所）がある。南越電気は、大正8年11月に福井市佐久良下町に資本金50万円（払込12万円）で設立され、翌9年10月16日鶴村での瓦斯発電で開業した。その後大正11年3月一光川発電所（五太子発電所）も開業している。社長は名村忠治<sup>7</sup>が務めていたが、仁作とともに発電事業に取り組んでいた三方郡の角脇林蔵も大株主の一人で取締役就任していた。この他、耳川水電株式会社、河野水電株式会社の役員陣である河崎清、上登野卯之助、中瀬宗太郎、伊藤宗助らも出資者に名を連ねていることもあり<sup>8</sup>、波寄瓦斯発電所の発電機設置工事や一光川発電所工事を受注し、湯尾発電所の設計から工事まで主要な工事を仁作が河野水電株式会社として受注した<sup>9</sup>。なお、南越電気には山田十左衛門や植木信一、西野市兵衛が取締役に就任しており、何れも仁作とは関係が深かった。

全	全	流 鉄 路	全	全	全	堰 休	堰 頂	水 叩	堰 休	堰 鑿	仮 堰	名 稱	種 類	長	斷 面	單 位	量	單 位	價 金	額	摘 要	
練石積	練石積	練石積	中鉄三石	全	全	中鉄三石	全	練石積	練石積		締切											
一〇	五〇	一五〇	五〇	三〇	八〇	八〇	九〇	九〇	九〇													
二〇	一五〇	五五	二五	一五	二六		二二	二二	一八													
			五六			一四																
五五六	二八五	二二九	八九六	一二五	四四四	一八六八	五六〇	三三〇	四八五	三五九	一〇											
〇	二五〇	二九〇	〇五〇	〇一五	〇一五	九〇五	二五〇	二五〇	二九〇	二二〇	二二〇											
一六一	五二七	六四一	八二八	四七五	五〇六	二九一	二四〇	八〇〇	二六六	五三八	六〇〇											
二四	七五		八八	七五	六〇	五〇			五〇	二八												
		前面					延長十六間分															

内  
譯

河野水電株式会社

一金貳万六千八百八拾圓六拾四錢也  
堰堤工事設計書

◆湯尾発電所堰堤工事設計書（河野水電の名義で受注している）

因みに南越電気の決算書（貸借対照表）には、大正11年5月31日現在で第二日野川発電所関係として「水力機械費 63,000円」「水路工事費 1,758円」が資産の

<sup>7</sup> 慶応元年生まれ、県会議員、衆議院議員など地方政治家として活躍し社会基盤整備などに功績があった。河崎、角脇ら三方郡の有力者も県会議員も兼ねており、この時期に交流を深めた。取締役の山田十左衛門や植木信一らも同じく県会議員であった。

<sup>8</sup> 南越電気株式会社「事業報告書」（各期）、なお仁作自身は出資していない

<sup>9</sup> 流量計算書や、各部門ごとの工事設計計算書が旧建設省文書として残されている。

部に計上されている<sup>10</sup>。

なお、第二日野川発電所（湯尾発電所）には後日談がある。

発注者の南越電気株式会社の経営難もあり、工事を受注した仁作（河野水電）が買収することで合意、大正 14 年 1 月 26 日の河野水電株式会社取締役会で買収を決め、6 月 30 の株主総会で正式に承認されている。

しかし、この問題は、電力業界に波紋を引き起こす。電力業界は許認可によって、供給地域が定められているが、仁作が第二日野川発電所（湯尾発電所）を買収した意図は、電力需要の伸びが著しい今立郡の織物工場群に動力として電気を供給することが目的であった。南越電気の取締役の名を連ねる西野市兵衛は福井を代表する地方財閥西野グループの総帥であり、今立郡に有力な製紙工場や織物工場を有していたからである。ただ今立郡は、福井県の電力業界の有力者越前電気株式会社の供給地域であり、軋轢が生じることは避けられなかった。当時の福井新聞は「河野水電、越前電気に挑戦」のタイトルでこの問題を取り上げている（「福井新聞」大正 14 年 4 月 6 日号参照）。

当時の電力業界は電力会社間で電気の安定供給のために相互に買電、売電を行っており、河野水電も渇水期には越前電気株式会社から買電し、また越前電気株式会社の発電所工事を受注するなど取引関係も深く、この問題に業界関係者の注目が集まった。

そのさなかの大正 15 年の夏は一段と渇水が激しく、各地の水力発電所の操業は困難を極め、工場も動力不足で生産調整を強いられる事態となった<sup>11</sup>。中小の電力会社にとっては厳しい状態であった。この結果、競合を避けるため、河野水電株式会社が越前電気株式会社の系列に入り<sup>12</sup>、買収した第二日野川発電所（湯尾発電所）を越前電気株式会社に売却することで合意し、この問題は決着した。

---

<sup>10</sup> 南越電気株式会社「第 5 期事業報告書」

<sup>11</sup> 福井新聞「水量不足に泣く各地の発電所」（大正 15 年 7 月 24 日）

<sup>12</sup> 大正 14 年にはすでに武周電力や三国電灯が越前電気に合併しており、その後も福井県電気業界の統合は進み、京都電灯福井支社と越前電気株式会社の 2 大グループに集約されていく。『北陸地方電気事業百年史』（平成 10 年、北陸電力）その他参照

河野水電株式会社 第拾壹回定時株主總會

議事録 一部抜萃

大正拾四年六月奉拾日福井市商業會議所樓上ニ於  
 テ河野水電株式會社 第拾壹回定時株主總會ヲ開  
 催ス 取締役社長伊藤仁作 議長トナル

議長曰ク之ヨリ開會致シマス 之時午後壹時  
 以下四十二行略ス

議長(伊藤仁作)曰ク大正十四年一月二十六日取締役會  
 決議ニヨリ南越電氣株式會社ノ有スル日野川發電用  
 水利使用権ヲ讓渡ケルコトヲ社長ニ任セラレ讓渡ノ契約  
 シマシカラシ御承認ヲ願ヒマス

沼地 承認ノ旨ヲ述ブ

河野水電株式會社

議長曰ク御承認ニテリマシカラシ議案ヲ附議致シマス  
 以下三十七行略ス

議長(伊藤仁作)曰ク當社ノ第十一回定時株主總會ヲ  
 開會致シマス 之時午後壹時略ス

右議事録ヲ證スル為定款第貳拾參條ニヨリ右ノ通り署  
 名捺印ス

河野水電株式會社 第十一回定時株主總會 署名員

議長 取締役社長 伊藤仁作  
 出席 監査役 河崎博次  
 全 中瀬富太郎

右騰本幅也  
 大正拾五年 月 日

◆旧建設省に残る株主總會買収決議議事録(抄)

この他に発電所工事や発電設備の据付事業に  
 関連して、仁作は地元有力者と協同し資材販売会  
 社として越前建材株式会社を設立し、経営にあた  
 っていた。

代表には織物業界の重鎮で、織物組合の組長を  
 務める久保義隆が就任。久保は複数の関係会社の  
 役員も兼務しているものの資材販売と直接結び  
 つかないが、幅広く建設資材の販売先を確保する  
 とともに、おりから力織機ブームで工場の動力を  
 中心とした設備投資の需要に応えるため知人で  
 地元の有力者久保義隆の名義を借用したものである。

本社、倉庫も仁作が豊島中町に所有する土地建物に置かれており、実質的な経営

◆越前建材株式会社(概要)

本社 福井市豊島中町  
 設立 大正9年3月  
 資本金 10万円(払込2.5  
 万円)  
 代表 久保義隆<sup>13</sup>  
 取締役 伊藤仁作  
 植木信一<sup>14</sup>  
 監査役 北川初五郎

<sup>13</sup> 久保は明治17年生まれで、県織物同業組合の副組長を2期務、組長を4期務めた戦前の福井県織物業界の中心人物。関係業界の要職だけでなく、県内主要企業の社外取締役なども務めた。昭和35年6月没。

<sup>14</sup> 新潟県生まれ、法曹界の出で弁護士、県議会議員として活躍した。戦後法務、大蔵大臣を歴任した植木庚子郎の義父にあたる。会社経営に直接携わることはなかったが、(株)福井民友新聞社、南越電気(本社福井市豊島中町)などの取締役就任している。

は、発電所関係資材は仁作と河野水電株式会社が、工場の電気設備は伊藤電機商会在が担っていた。

その後耳川水電株式会社は、社長を務めていた河崎清が衆議院議員として多忙を極め、またこの頃から病を煩い経営の全般を掌握することが難しくなり、後継者の増治も医院を開業しており、事実上経営責任者不在状態に近くなった。このため帝国電灯株式会社への譲渡話がすすみ、昭和初期には仁作は事実上福井県内の水力発電所関連会社からは手を引くこととなった。越前建材株式会社も、同じ頃解散したと考えられる。

### 第3章 朝鮮進出、化学工業、鉄道事業への参入

#### 朝鮮への進出

電力事業の海外（朝鮮）進出の動機ははっきりしないが、すでに福井県関係者の少なくない人物が渡鮮しており、これらに刺激されての進出であったと考えられる。

福井県企業の戦前期の海外進出は、繊維関係の染色・織物で昭和9年に柳町染工場（代表柳町助光）が朝鮮京畿道始興郡に朝鮮染色整理工場、昭和11年には山仙織物（代表山田仙之助）が朝鮮仁川府日出町に日鮮染工株式会社を、昭和12年に酒伊繊維工業株式会社（社長酒井伊四郎）が満州に満州豆桿パルプ株式会社として進出していることが知られるが<sup>15</sup>、仁作の朝鮮進出はそれよりも10年以上はやく、商業・貿易など小資本を除けば、福井県における海外進出の嚆矢であった。

#### ◆公州電気株式会社（概要）

本社 福井市佐久良下町  
（後に朝鮮・公州に移転）

設立 大正10年5月

資本金 10万円（払込5万円）

発電所 忠清南道公州郡公州面錦  
79

取締役 西野市兵衛

伊藤仁作

柳原九兵衛

山田十左衛門

進藤次郎

牧野秀松（公州在住）

藤澤英夫松（公州在住）

監査役 山南庄次郎松（公州在住）

河崎清

角脇林蔵

本社は最初福井市佐久良下町の伊藤電機内に置かれ（後に朝鮮現地に移転）、大正10年9月に操業を開始している。資本金は当初10万円（払込5万円）、出力は69Kwでガス、重油を使用した火力発電所であった。役員は大出資者である西野市兵衛、柳原九兵衛、山田十左衛門が取締役入っており、仁作と関係の深い三方郡の河崎清や角脇林蔵は監査役に入り、このほか公州在住3名が取締役や監査役に入っている。

発電所が置かれた公州は韓国忠清南道中央部に位置し、百済の首都が置かれたこともある都市である。経営は順調だったようで年率10%の配当を維持していた。

社長は開業当時西野市兵衛が就任したが、実質は伊藤電機商会の経営で、取締役の進藤次郎（仁作の義兄）が現地で経営の実務を担当した。当初資本金10万円（払込5万円）でスタートしたが、大正末には全額払込となり、昭和5年には資本金を20万と倍増し、払込金額も12万5千に達した<sup>16</sup>。一連の増資分の大半は仁作の伊藤電機で担ったと考えられ、これに伴い社長も西野に代わって仁作自身が就任し、一時朝鮮に渡り、直接経営にあたった<sup>17</sup>。これには娘婿の伊藤肅（後、斉本肅）を同伴

<sup>15</sup> 詳細は拙稿「戦前期福井県企業の海外市場アプローチ」（『ふくい経済研究』平成20年8月第7号）参照

<sup>16</sup> 朝鮮総督府逓信局編『電気事業要覧』（各期、朝鮮電気協会）

<sup>17</sup> 朝鮮総督府逓信局編『電気事業要覧』第20回（朝鮮電気協会、昭和8年）



社長は西野一族の総帥西野市兵衛が就き、仁作は専務に就任すると同時に朝鮮の公州電気株式会社に一時派遣し、その撤退とともに帰国していた娘婿の伊藤肅を支配人として実質的な経営に当たさせた（会社概要参照）。伊藤肅は家族ともども味真野に移り、工場敷地内の事務所に隣接した家屋を住居とした。

創業当時の設備は粗製炉 10 基で月産生産能力 200 トンであったが、14 年には 14 基 303 トンに増設拡充している。

この地を選んだのは西野一族との関係はもちろんであるが、操業に必要な温度の低い冷却用の水資源が豊富なこと、また物流面での優位性も事由であった。物流面では南越鉄道（武岡軽便鉄道<sup>19</sup>）が武生から五分市まで開通しており、工場近くには五分市駅が在り、敷地横を軌道敷かれていたのである。ここから専用側線を工場に引き込み、原材料の入荷や製品出荷にあたった<sup>20</sup>。

工場は午前 6 から午後 6 時、午後 6 から翌日午前 6 時までの 2 交代 12 時間勤務、毎月 1 日と 15 日は休日であった。服務規律は厳格で、服装も職種により異なり、所定の要件を満たしていない場合は作業への従事停止処置がとられた。



◆当時の事務所が現存している

しかし、この経営に伊藤仁作が長く関与することはなかった。化学工業への情熱は冷めていないものの、主要な取引先は東洋紡績敦賀工場で、西野一族には「人絹王」西野藤助（人絹取引所理事長、福井商工会議所会頭）もおり、事業内容で西野家の事業との結びつきが強かったからである。また工場の隣接地に同じく西野一族がセロファン工場（東洋セロファン株式会社）を運営しており<sup>21</sup>、これも東洋紡績ともども大演化学の主要な取引先

で、化学工業分野ではむしろ西野一族に経営を委ねたほうが事業としての発展が期待されたからである。このため、数年で持株を西野一族に譲渡し経営から撤退、支配人の伊藤肅も今立郡味真野村を引き払い伊藤電機商会に戻っている<sup>22</sup>。

<sup>19</sup> 武岡軽便鉄道は明治 44 年の設立で、大正 3 年 1 月に武生～五分市間で開業、その後栗田部、岡本新、戸ノ口と延伸した。大正 7 年 3 月には武岡鉄道に社名変更している。その後、昭和 16 年 7 月に福武電気鉄道に合併し同社の南越線となった。

<sup>20</sup> 「社報かせい」（昭和 40 年 7 月第 3 号、昭和 49 年 4 月第 38 号）

<sup>21</sup> 隣接地の味真野村上真柄 39 で、昭和 9 年 3 月西野一族が出資し、払込資本金 50 万で設立。役員は西野一族が大半を占めていた。

<sup>22</sup> 戦時中大演化学工業株式会社は西野一族の経営を経て昭和 16 年 6 月東洋紡績株式会社に設備一切を賃貸し同社の福井化学工場となった。戦後は東洋紡績から分離・独立し、現在は東洋紡績系列の東洋化成武生工場として事業を継続している。工場敷地内には創業当時の事務所が現存している。なお『百年史 東洋紡』（昭和 61 年、東洋紡績株式会社社史編集室）に経過の一部について僅かであるが記載がある。



また電気器具商として記載されているのは伊藤電機商会 1 社のみで、伊藤仁作が福井県における電気器具商の嚆矢であることが資料からも裏付けられる<sup>23</sup>。

この人名録が発刊されたのは大正 2 年 10 月で、直前の 7 月に伊藤電機商会は本町通りに移転しているが、発刊までのタイムラグもあり旧住所の呉服町（照手上町）で記載されている。

大正 8 年 1 月発行の『福井商工人名録』（福井商業会議所編）には、電気請負業者として伊藤仁作が、電気器具商として伊藤真之丞が並んで記載されている。他に関連する事業者は記載されていない。なお、伊藤仁作の伊藤電機商会は総合電気工事事業者としては、福井県で嚆矢のみならず北陸でも最古参に属する（「第 6 章の「電気工事業の統合と北陸電気工事の発足」参照）。

住所は移転後の本町通り（佐久良下町）で記載されている。数字は大正 2 年の『人名録』同様に上段が営業税、下段が所得税で、大正 7 年現在の税額である。

営業税でみると両者合わせて 186 円に達している。当時の福井市内の事業者の営業税は 10 円～30 円が大半で西野藤助（2423 円）、黒田與八（339 円）、安本吉次郎（734 円）ら著名な生糸商、羽二重商を別格として除けば、トップクラスにあった<sup>24</sup>。

大正期は福井県にとっても電力の高揚期にあたり次々と電力会社が創立されていく。全国でも、電力の普及に伴い従来電気設備関連一切を自社で施工していた電力会社は、内線工事や電灯の取付け・保守を、また送電線工事などを外注する機会が増えていったが、福井県でも同様であり、電気の普及とともに伊藤電機照会の業績は順調に伸びていった。

加えて明治終わりから福井の主力産業である輸出羽二重業で、力織機が導入されたことが産業面での電気需要を伸ばすことになり、業績向上に大きく貢献した。特に福井県下の羽二重業者は力織機の導入に積極的で、当初は蒸気機関や自家発電を利用したが、まもなく電力利用に移行し、これがまた力織機の導入にさらなる拍車をかけることとなったのである。

伊藤電機商会は発電機などの据付け保守はもとより、動力としての電気導入が一般的になる中、工場内の電気配線でも地元機業家の力織機導入を扶けた。伊藤電機は古くから松下電器製作所（後の松下電器産業株式会社、現パナソニック株式会社）の代理店であったが、きっかけはこの松下の配線器具であった。

---

<sup>23</sup> 戦前福井県の電器取扱店としては島田兼吉商店（後の島田電機商会）、久保田商会（後の久保田電気商会）がある。島田兼吉商店は明治期にガラス取扱業として創業し、後に松下のソケットなど電器製品を取扱うようになった。久保田電器商会は自転車店として創業したが、松下が自転車用のランプ（大正 12 年の砲弾型ランプ）を開発し、販売強化に取り組むなかで、自転車用品の一部として電器用品取扱いを兼ねるようになった。その時期は何れも大正末から昭和初期である。この他老舗としては戦後に業容を拡大する酒井電機があるが、創業は昭和 3 年である。なお福井県における家電業界のあゆみについては別に論じなければならない。

<sup>24</sup> 『福井県資産家番付』（大正 10 年、若越書院）その他も参照

仁作は大正9年3月1日付けで大阪営業所（北区衣笠町5番地、後に支店に昇格）を開設しているが、これは営業や工事部門ではなく、主に資材調達や販売部門の商品仕入れに関する連絡事務所の性格を有するものであった。

大正10年現在の福井県関係電力会社

事業者名	操業開始日	県内供給区域
京都電灯株式会社 福井支社	明治32年5月	福井市、大野郡、足羽郡、吉田郡、坂井郡
敦賀電灯株式会社	明治41年3月	敦賀郡
越前電気株式会社	明治42年8月	今立郡、南条郡、丹生郡、大野郡
三国電灯株式会社	明治44年4月	坂井郡
大聖寺水電株式会社	明治44年12月	坂井郡
白鳥電気株式会社	大正3年8月	大野郡
武周電力株式会社	大正3年9月	丹生郡
勝山電力株式会社	大正4年4月	大野郡
大正電気株式会社	大正5年11月	足羽郡、今立郡
耳川水電株式会社	大正7年1月	三方郡
若狭電気株式会社	大正9年1月	遠敷郡、大飯郡
日野川水力発電 株式会社	大正9年5月	南条郡
南越電気株式会社	大正9年10月	坂井郡、丹生郡
河野水電株式会社	大正10年2月	南条郡、丹生郡
福井電力株式会社	未操業	大野郡予定

逓信省電気局編『電気事業要覧』（逓信協会）その他より作成

